
真夏の夜の小さな光

塩キャラメル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夜の小さな光

【Nコード】

N8492C

【作者名】

塩キヤラメル

【あらすじ】

父親に捨てられた母と少年・拓人。彼らは母の実家に戻るが、そこには不思議な伝承があった。曰く、「運命を変える話」――。少年の運命、母の思い、死んだおじいちゃん。彼が死んだ理由――。拓人が運命を変えようとするとき、さまざまな想いが交差する。

序章

それは、少し前のことだった。

僕にだって、少し前にはちゃんとほかの子みたいにお父さんがいた。

だけど、今の僕にはお父さんがいない。

あの日、僕はおばあちゃんと家を出た。

田舎からわざわざやってきたおばあちゃんと、ランドセルを買っためだった。僕はまだ、友達のようなピカピカのランドセルを買って貰っていなかったから、喜んで家を出た。

そのとき気付くべきだったんだ。おばあちゃんの、お父さんの、そして何よりお母さんの様子が違うということに。

僕は、おばあちゃんに「さんまんえん」するランドセルを買って貰った。

「さんまんえん」というのは、お金のことなんだろうが、まだ僕にはよく分からない。それも、学校に行ったらわかるはずだと、僕は鼻歌を歌っていた。

そして、帰ってきたときには、お父さんはいなかった。お母さんだけが、家にいた。

「お帰りなさい」

と、お母さんは悲しそうに言うだけだった。

そのとき、お母さんが浮かべていた悲しい悲しい笑顔を、僕はきっと忘れないと思う。

その日から、僕がお父さんに会うことは——なかった。

バスの旅

宿題を終えて台所に行くと、お母さんが夕食の準備をしていた。そこから漂う美味しそうな匂いで、僕は夕食のメニューを推測する。甘くて、とろけるような、でも香ばしいこの匂い。

（これは、もしかして――）

「お母さん、今日はグラタンだね！」

「当たり前」

僕が元氣よくそう言つと、お母さんは悪戯っぽく笑った。

「やったあ！ 今日はお父さんも早く帰ってくるから、みんなで食べられるね」

お母さんはいつもどおり笑って答えた。

「そうね、みんなで食べられるね」

（――おいしいね、お母さん……）

そう思ったとき、頭に鈍い衝撃が走って目を覚ます。

「痛っ……そっか、夢かあ……」

拓人は頭を座りながら座席に座りなおす。隣に座っているはずの母・加奈子の横顔を盗み見すると、思いつめたような顔をして、ただひたすら前を見ていた。

まだやつと見えるようになったばかりの車窓から、外の風景を見る。

窓の外に広がるは一面の水田。それからずっと先には壮大な山が続いている。夏の青々とした稲が夏の空によく映えている。その景色を見て、僅かに感じる懐かしさ。

拓人が住んでいた都会の高層マンションから見る景色とは大違いだ。都会育ちの拓人が、こんな田舎でバスに揺られているのは訳がある。

それは、両親の離婚。

「拓人」

加奈子が、物思いにふけっていた拓人の肩をぽんと優しく叩いた。
「もうすぐ降りるから、ね」

「うん」

素直にうなずくと、加奈子は悲しそうな顔を無理やり笑顔にした。
（そんなに、無理して笑わなくてもいいのに）
と、拓人は思う。

離婚した父が、いまさら家を出て行けと言ってきた。だから、
加奈子の実家であり、拓人にとっては祖母の家に向かっている。

離婚した原因は、父の浮気。

父は真実を知って激し、理由を聞こうとする加奈子に目を合わせる
ことすらせず、こう言ったのだ。

「お前には、俺は勿体無いだろ」

自分が寝静まってから、起きた喧嘩。

でも、大声に起きて、誰にも知られることなく、見て、聞いてしま
った喧嘩。

父の言い放ったその言葉を聞いた途端、加奈子は怒鳴らなくなっ
て、ただ棒立ちになった。

父は、そんな彼女の姿を一瞥し、携帯電話と財布、それと煙草を持
って出て行った。

「お前には、俺は勿体無いだろ」

なんて思い上がった言葉。

加奈子に、何が足りなかったというのか。

料理だって出来た。

揚げ物だって簡単に出来るし、いつも美味しい手作りのご飯を出し
てくれた。

裁縫だって出来た。

親戚の女の子のお母さんに、子供の浴衣が上手く作れなくて困っていると泣きつかれ、優しく丁寧に教えていた。

家事も、母親としても、人間としても。

完璧ではないにせよ、決して劣っていたわけではない。

それを、そんな母を、父はたった一言で切り捨てた。

それから、いつもどおりに毎日が過ぎた。拓人は、二人が仲直りしたのかと思っていた。

しかし、そうではなかった。拓人の知らない間に、二人の関係は壊れていたのである。

そしてあの日、父は出て行った。

思い出される、祖母が加奈子に会ったび言っていた言葉。

（――「あの子は、自惚れが強すぎるから」――）

そんな最低な父のことを思い出しているうちに、顰め面になっていたらしい。加奈子が心配そうに聞いてきた。

「拓人、どうかした？」

はつとなった拓人は慌てて言う。

「な、なんでもないよ」

「そう？ もう降りるからね」

「う、うん」

無愛想な運転手の顔を横目で見て、加奈子は自分達の分のお金を入れていく。「あんがとございましたー」という運転手のいい加減な挨拶を聞きながら、バスのステップを降りる。

バタンと、無駄に大きな音を立ててドアが閉まり、都会ではありえない土ぼこりをあげて走っていった。

せみの声がやけに五月蠅かった。蒸し暑い風が拓人の頬絵を撫でる。

「それじゃ、行こっか」

「うん」

周りには水田と山しかない、舗装されていない道を二人は歩いていく。

親子

「拓人、明日買い物にでも行こうか」

夕食の席でおばあちゃんが言った。手には炊きたてのご飯が入

った大きなお茶碗。卓袱（

（ちゃぶ）台に置かれたおかずの数々。

よばよばのおばあちゃんではなく、快活に笑う元気そうなおばあちゃん。拓人は、このおばあちゃんが大好きだった。

「うん、どこに行くの？」

と素直に答える。

「買い物？ スーパーにはここから車で一時間はかかるんだよ、私は明日休みたいな」

と珍しく加奈子が異論を唱えた。加奈子は普段、誰かの提案に笑って頷くことしかしなかったのだが。

加奈子はたくあんを箸でつかむと、おいしそうに口に入れた。

「せっかく、加奈子と拓人が来てくれたんだから。一緒にみんなの好きなものを買に行こうと思ったんだけどね」

とまた珍しく、おばあちゃんは『加奈子』と名前で呼んだ。普

段、拓人の前ではお母さん、と呼んでいるのに。

（……もしかして）

拓人には、思い当たる節があった。

離婚してからというもの、二人に会う人は皆、拓人よりも加奈子に気を遣っていた。

（みんなみたいに、僕よりもお母さんに気を遣ってるのかな）
子供ながらに的確な推理。そしてそれは的中にしていた。

拓人は、その気遣いを邪魔しないよう、口を挟まずにご飯を食べ続ける。

「珍しいね、加奈子がグダグダしたがるなんて」

「いいでしょ、たまには甘えさせてよ。ここまで歩いてくるのに、

私も拓人もすごい疲れたんだよ、おかーさん？」

こうして、家族の食事は続く。

拓人には、その光景がやけに遠いように感じられた。

拓人は、おばあちゃんと加奈子よりも早く夕食を食べ終え、夕方まで昼寝していた部屋に入った。

そこは、死んだおじいちゃんの部屋で、彼の生前のものがそのままにされている。見た目は、まるで図書館だった。

なぜなら、おじいちゃんには日本全国の伝承を調べる、という変わった趣味があったからである。

おかげで、天井まで届くほどの本棚は大きさも厚さも不揃いな蔵書で埋め尽くされ、はしごも一つ、この部屋においてある。

病氣にかかり、今は空き家となっている隣の部屋で寝たきりになっていたおじいちゃんのために、拓人がはしごに登って本をとってあげていた時もある。

そんな大好きなおじいちゃんの思い出が詰まった、大切な部屋。

幼い頃、「どうしておじいちゃんはこのが好きなの？」と聞いたことがある。

そのときおじいちゃんは、優しい笑顔で答えたのだった。

——「こういう、いかにも空想の産物のようなお話には、いつだって隠された真実があるんだ。おじいちゃんはそれが知りたくて、こういうことをやっていると思うんだ」——

まだとても幼かった拓人はその意味をよく理解することが出来なかった。だから何回も聞きたがって、おじいちゃんを困らせたのを良く覚えている。

拓人はそんなおじいちゃんの影響があつてか、各地の伝承を調べるのが好きだった。もっとも、古文レベルの文は読めない。分かりやすく、現代語訳されたものしか読めなかった。

拓人はおぼつかない足取りではしごを持ち上げ、とある場所に降ろす。そして、一番上の段のはじめに隠すようにしまつてあつた薄い一冊の本を取り出す。

「あつたあつた！ 前から一度読んでみたかつたんだよね」

拓人がおじいちゃんに本をとつてあげるようになってから見つけた一冊の本。これ読んでもいい、とおじいちゃんに聞いたとき、これだけは読ませられない、お前には早すぎると読ませてもらえなかつた本。

拓人は三段目くらいまで身長に降りるとそこからぴょんと飛び降り、部屋の真ん中でうつ伏せになつて本を読み始めた。足をぶらぶらさせ、瞳をキラキラと輝かせながら読み進めていく。

だが、予想に反して、面白い話もなく半分以上が過ぎた。だんだんと瞳から輝きが消え、本の内容にも飽きてきた。

（もしかして、これは全然詰まんないからダメって言つてたのかな？）

そろそろ本棚に戻そうかと思つてきたとき、ふとページをめくる手が止まつた。

拓人の視線は、とある一転に釘付けになっている。

その目線の先は――

『運命を変えた話』。

運命を変えた話

昔々、ある村にとても仲の良い恋人がおりました。

二人は、もう少しで結婚することになっていました。

そのとき村は凶作でしたが、二人の両親もその結婚を嬉しく思い、また村人達も二人が末永く暮らせるように願っていました。

ある日のことでした。

ある女の人が、山神様に捧げられることになりました。生贄としてその女の人を山神様に捧げ、その代わりにこの凶作を何とかしてもらおうとしたのです。

その女の人とは、もうすぐ結婚する、あの女の人でした。

男の人は村長に、生贄を変えてくれないか、せめて捧げる日を延ばしてくれないか、と頼みました。しかしそれは、認められませんでした。

「くじで決まったんだ。お前さん達には悪いが仕方ない。期日は明日だ」

村長はそう言いました。

その日の夜、男の人は山神様を祭る神社の前で泣きながら祈りました。

「どうか……あいつの運命を変えてやってください。あいつを死なせたくはありません」

何時間も泣き続け、祈り続け、そして丑三つ時になりました。

「どうか……どうか……」

「本当に、運命を変えたいのかい？」

言いかけた男の人の言葉を遮るように、若い女の人の声は言いました。

「山神……様？」

「質問に答えな。本当に運命を変えたいのかい？」

同じ問いをその声は続けました。

「変えたいです」

「お前の恋人を、助けたいのかい？」

男の人は、今度は力強く言いました。

「恋人を助けたいです。 助ける方法が、何かあるのでしょうか？」

「方法はある」

声は勿体つけて言いました。

「要するに、生贄はお前の助けたい娘でなければいい。 運命を変えて、別の女に変えたい。 そういうことだね？」

絶句する男の人。 声は続けます。

「お代をもらうよ。 お前の命」

「私の、命？」

「運命を変えるんだ、お前一人の命では足りないくらいだよ」

男の人は、少し考えてから言います。

「それでいいです。 あいつの命が助かるのなら」

声は少しの沈黙の後、言いました。

「いいのかい、それで？ 自分の命を捧げ、他の女を生贄にする。

幸せになるのは、お前の可愛い娘と村人どもだけ」

男の苦悶の表情を楽しむかのように、なぶるように続けます。

「お前達は結ばれない。 女のほうは、少し経てばおまえのことを忘れて、ほかの男と一緒にになるかもしれない」

「それでもいいです」

男の人は言いました。

「止めるのなら今のうちだよ。 本当に、いいのかい？」

「お願いします。 あいつを、助けたいんです」

男の人が言うと、声は嬉しそうに続けました。

「契約完了だね……」

男の人が目覚めたのは、次の日の朝でした。 誰かが自分の顔を覗き込んでいます。

「大丈夫？」

覗き込んでいた、女の人が尋ねます。

「生贄は、誰だ？」

男の人は、女の人の質問に答えずにそういいいます。

「お隣の娘よ、どうしてそんなこと聞くの？」

男の人は、飛び上がらんばかりに喜びます。

「お前は捧げられないんだな、良かった」

そういつて、立とうとしました。

「あ、ダメ！」

が、立つことができず、布団の上にすくと尻餅をつきました。

「あなた、昨日倒れたのよ。立っちゃだめよ」

（そんな……）

声言っていた通りになりました。だとすれば、自分は、

（もうすぐ、死ぬ……？）

男の人はその日の晩、死んでしまいました。

巡り合わせ

—— ぱたり。

そんな軽い音を立てて、「運命を変えた話」が入った本は閉じられた。

拓人に襲い掛かってくる感覚は、虚脱感。

(—— これだけ？)

「運命を変えた話」。この題名を見つけたときの、あのなんともいえぬ期待。

まるで、今の自分の状況を変えてくれるかのような。

でも、その気持ちはこの話を読み終わった後、すぐに消えてしまった。

これが、おじいちゃんが生前拓人に見せようとしなかった秘密の本、なのか。

そう思っただけで、ため息をついても状況は変わらない。

答えるべき人はもう、いない。

そう思うと、いまさらながらに涙が出た。

もう、おじいちゃんが死んで何年にもなるのに。

それとも、この涙は状況を変えられない悔しさから来たものなのか。

考えることさえバカらしくなっていた拓人は、薄い本をダンボールの中に投げ入れる。

踵を返し、またひとりになれる部屋を探しに出て行った。

——あの本を見つけた日から数日が経っていた。

田舎の夏は飽きることがない。都会ではアスファルトに蒸し返され、熱いだけだったのだが、山の中にあるおばあちゃんの家は風が良く入って都会よりは涼しかった。

何人かの友達が出来て、川遊びに行った。おばあちゃんも拓人に気を遣ってくれて、いろんなところに連れて行ってくれた。

大きく育った収穫前の、青々とした稲といっそ清清しいまでの蒼い空は幼い拓人にも感銘を与えた。

お母さんも、自然な笑顔を見せるようになってきて、今日は田舎なだけに広い庭で散水ホースを振り回しながら遊んでくれた。

清清しくもどこか哀しい夏休みは、まだ始まったばかり。

「そうだ拓人、裏の神社の山神様に挨拶に行かなきゃねえ」

その日の夕方、おばあちゃんは呟くように言った。

夏の夕方の風は涼しい。ミミミミミ、と夏の虫が鳴いている。まだ明るい、もう五時ごろだった。

「山神様？」

慣れない団扇をパタパタと扇いでいた拓人は鸚鵡返しに答えた。

山神様で思い浮かぶのは、数日前に読んだ「運命を変えた話」。

「そうだよ、爺さんがお前には話すなつて言つてたんだけどね、この山神様は運命を変えたことがあるんだよ」

すると、あの話はこの地の伝承だったのか。

「そういう伝承があつたんだよ。まあ、本当のことか分からないけどね」

おばあちゃんは信じていないらしく首をすくめた。

かさ。

自分のサンダルを動かした音が、やけに大きく深夜の家に響いた。

（起きないよね、お母さん達）

そう思いながら、今度は細心の注意を払ってサンダルを履く。

ガラガラ……となるべく音を立てないように引き戸を開けたが、それでも音はしてしまった。

もう一度閉めて、外に広がる深夜の闇……というより、明るすぎる月明かりの中に立つ。

青白い光の中に聳える山々はどこか不気味で、それ以上に幻想的だ。

そして、幼い拓人が何故こんな深夜に家を出たかというと――、

もちろん、運命を変えてもらうためだった。

再来（前書き）

とうとうあの人がやってきましたよー

再来

「おい拓人、早くこっちに来いよ！」

物思いにふけていた拓人を、最近出来た友達・健太が呼んでいた。

健太は川沿いにいくつも立っている大きな岩の上から大きく手を振っていた。

「うん、今行くー!!」

拓人の声を聞くと、悪戯っぽい笑顔で健太は大きくうなずいた。

拓人はバチャバチャと水音を立てて、大岩へと走っていった。

数日前会った、山神様は伝承と違って、人間の姿をしていた。

大昔の民話に出てくるような神様のくせに、黒いフード付きのマントなんか着ていて、そのフードは口元がやつと見えるくらいまで目深に被っていた。

僅かに見える口元とあごの骨格は明らかに女のもので、赤い唇は

——この近くの墓地の周りで咲いていた綺麗な花——彼岸花の花弁のようだ、と拓人は思った。

『山神』様はまるで拓人が来るのを待っていたかのように、自らを祭る本殿の前に立っていた。

「山神、様ですか……?」

ここまで来るのに全速力で走っていたせいか、拓人の息は荒い。

「そうさね。 お前、私に何か用があるから来たのだろう?」

やはりお見通しだったようだ。 少し驚きつつも頷くと、山神は赤い唇で笑みを形作る。

拓人は大きく息を吸い込んで言う。

「はい。 —— 僕とお母さんを、お父さんに捨てられる前の時間に戻してください」

「それは、時間流を巻き戻して欲しいということかね? それとも、お前達家族三人の生活を、取り戻したいということかい?」

後者のほうが正解で、それを告げればいいだけの話なのだが、几帳面な拓人は思わず聞き返してしまった。

「あの、時間流って……?」

「ああ、お前にはちと難しかったかね。 俗に言う、た、たい——」

拓人は時間と、『たい』という言葉で思いついた言葉を言う。

「タイムスリップ?」

「そう、『たいむすりっぷ』というやつだ」

拓人が言うのと山神は手をぽんと叩いて納得した。 覚えてぞ、というように頷いているが、多分数分後には忘れているだろうと拓人は思った。

まったくらしくない、想像していた“山神”像とのギャップに拓

人はなんだかげんなりした。

「で、どっちなんだい？」

そんな拓人に気づいたのか、山神はぶっきらぼうに聞いてきた。山神に機嫌を損ねられては駄目だ、そう考えた拓人はさつさと言う。

「あの、後のほうの、三人で暮らしたいです」

さつさと言うつもりだったが、結構しどろもどろになってしまった。山神はそんな拓人を見てふんと鼻で笑う。

「それで？ お前はあの話を知って私のところに来たようだが、命を差し出す覚悟はあるのかい？」

「……………」

はい、と言うつもりだったが声が出ない。 何度か声を出そうとして口をパクパクさせるも、やはり出ない。

「ふん、まだ決心は付いてないようだね。 しょうがない、三日間だけ待ってやる」

拓人はなんだか罰が悪くなる。 山神はぷいっとそっぽを向いた。

「…………ごめんなさい」

「ふん、せつかく人が待ってやるってんだから、言うのは“ありがとうございます” だろ？ だが」

そういうと、山神は拓人に向き直り、真剣な口調で言った。

「次は、なにか美味しいものを持ってきて欲しいね。　饅頭とか」

健太が乗っていた岩は、川沿いにたくさん転がっている大岩で二番目くらいに大きかった。　十メートル弱は有るだろう。

登って岩の上から川を見ると、結構な距離があることが分かる。

健太は平気な顔して岩の端っこに座っていた。

「こ、怖くないの？」

「怖いもんか。　まあ、みんなは怖がってあっちの岩しか登ってこないけどな」

というと、健太は少し離れたところにある岩を指差した。　この岩に比べるとかなり小さい。

「俺と同年でこの岩に乗れたのはお前だけだよ、拓人。　お前なかなか見所あるな」

健太は悪戯っぽく笑った。

健太たちがこんな大岩に登って何をしているかというと、この岩から川に飛び込むのである。

大きな岩から飛び降りられる者は尊敬され、出来ないものはバカにされる。　もつとも皆サバサバした性格であるため、さほど深刻ないじめにはならないが。

だから、この歳の子供で一番大きい岩から飛び降りることが出来

る健太はガキ大将として名を馳せている。 拓人はこの遊びを数日前に知ったばかりだが、普通並の大きさの岩から飛び降りることが出来た。

「なあ拓人、ここから飛び降りてみるよ」
「やだ」

だが、何故かこの岩から飛び降りる気は起きなかった。 登ることはできても、健太のように川の近くに座ることが出来ない。 怖い、という以上に何か——本能的に飛び降りてはいけない、と思った。

「なんだよ拓人、付き合い悪いな」
「どこで覚えたのそんな言葉」

次の日、拓人はぼーっとして過ごしていた。 朝早くに健太から今日も遊ばないかと誘われたが、さすがに疲れたので断った。

団扇を扇ぎながら寝転がり、ぼーっとした頭でテレビを見る。 見てもまったく情報が入ってこない。 ただせみの音がうつとおしかった。 正午過ぎごろにおばあちゃんがそうめんが出来たと呼んでくれた。

食事は茶の間で食べる決まりなので、拓人はぼーっとした頭で歩いていく。

「あつー……」

と呟いたような呟かなかったような。

おばあちゃんは拓人のそんな様子を見て、

「なんかのタイミングで頭ぶっ叩かないとかね」

と言った。拓人は反論する。

「だったら、クーラー入れようよおばあちゃん。暑いよ」

加奈子に意見を求めようとして拓人は、そこで初めて加奈子がい
ないことに気づいた。

「お母さんは？」

「お隣さんに回覧板持ってた」

「僕に行ってくれば持ってたのに」

拓人はそういうと、自分の定位置に付いた。そしてすぐにおば
あちゃんが氷で冷やされたそうめんを持ってくる。

拓人はわあ、と小さく感嘆すると食事の挨拶をしてそうめんをす
する。ずずーっという音がなんだか心地よかった。

「美味しいかい？」

「うん、美味しい！」

そう素直に感想を述べるとおばあちゃんはそうかい、と優しく微
笑んで拓人が美味しそうに食べるさまを見守る。拓人はそんな姿
を見て、

「おばあちゃんってさ、やっぱりお母さんに似てるよね」

「当たり前だろ？ 親子なんだから」

「じゃあ、僕とお母さんも似てるところあるのかな？」
「きつとあるさ。でも悪いところは似ないといいね」

そう二人は言つと、笑いあつた。

ギンゴーン、と古臭いチャイムの音が鳴る。 誰か来たのだろうか。

「郵便屋さんかね？」

「僕、出てくるよ」

拓人は茶の間から出て、軽い足音を立てて玄関へ向かう。 おばあちゃんのサンダルを足に引つ掛けて玄関の引き戸を開ける。

「はい、……！？」

拓人は玄関前に立っている人物を見て絶句した。

（——そんな）

「お、父……」

（——どうして、今更）

「お父、さん……」

そこに立っていたのは紛れもない、拓人と加奈子を捨てた父親だった。

再来（後書き）

次回、お母さんの正念場です!!

母親

「お父、さん……」

絶句して立ち尽くす拓人を見て、父親は眉根を寄せる。辺りをゆっくり見回し、口を開く。

「加奈子は、どこだ？」

ぶっきらぼうに言う父親に、拓人はしぶしぶと答えた。

「…………… 回覧板持ってた」

「そうか」

軽くため息をつく父親を見て拓人は何を抜けぬけと、思った。加奈子と自分を捨てた男がどうして今更会いに来たのか、と。普段は温厚な拓人も怒っていた。

「拓人ー？」

パタパタとスリッパの音を立てて来たおばあちゃんを見て、父親は軽く頭を下げた。振り向いてみるとおばあちゃんは唇を引き締めている。

「上がったらどうですか」

いつもとは違う、とげの入った声。本当は入れたくないのだろう。そんな滅多にないおばあちゃんの姿に驚きつつ、大人とは嫌な相手も家に上げなくてはならないのか、と思った

「ああ、ありがとうございます」

そう頭を下げると父親は靴を脱いで家上がる。 呆然とする拓人を置いて、おばあちゃんは客間に案内する。 襖を閉めるとおばあちゃんは拓人の前にやってきて囁いた。

「拓人、おばあちゃんとお母さんとで話すから、お前はいつも寝ている部屋に行きなさい」

そう話すおばあちゃんの顔はいつになく真剣だった。 何も言わずに頷くと、おばあちゃんは気休めのような笑みを浮かべて、拓人の頭に手をポンと置いた。

「いい子に待っているんだよ」

——あの人 came。

私はそのことを母さんから聞いて愕然とした。 どうして、今更来るの？

回覧板を渡し終え、うちに帰ってきた途端に母さんに台所まで連れて行かれ、そこで聞かされた。

「とにかく、あの人はお前と話したいそうだよ、拓人のことで」

母さんは真剣な口調で言った。 どうせあの人がある客間には声は聞こえないだろうが、母さんはコソコソと言った。

「どうせ親権のことだね。 あの方は拓人を奪いに来たのよ！」

私は少しヒステリック気味に答える。 対して母さんは冷静だ。

「そうだろうね、だからこそ渡さないんだよ。 いいかい、加奈子」

母さんは震える私の肩をつかみ、きっぱりとした口調で言った。

「加奈子、あの子はとてもいい子だ。 あんな、お前を捨てた男にやれる子じゃないんだ」

そうきっぱりという母さんの瞳を見据えて、私は力強く頷いた。
(そうよ、あの子をやるわけには行かない。 私はあの子の母親なんだから)

「何の、用で来たの」

そう切り出す私の声は思っていた以上にか細い。

彼は私と机をはさんだ正面にいて、母さんは私の横に寄り添うように座っている。 本当は母さんにすがりたい、だけど今の状況はそれを許してくれるほど生易しいものじゃない。

「拓人のことで来たんだ。 お前、こんな危険なところに拓人を連れてきて、どういっつもりだ？」

彼は咎めるように言った。 私は危険なところ、という彼の言葉に言葉が詰まったが、引くわけには行かない。

「別に。 あなたが私達を捨てたから。 私達がどこに行こうと勝手でしょう？」

露骨な嫌味で返す。 彼の表情には動揺が感じられない。 彼は軽くため息をついた。

「俺は、拓人をここから連れて行こうと思う。 こんなところにいさせておけない」

「どうして？」

「向こうもいって言うてくれたんだ。 東京のほうがいけると便利だし、なにより拓人が今までの学校に通えるだろう」

拓人はまだ転校手続きを済ませていなかった。 母さんの強い薦めもあって、いろいろな手続きより一旦休むことを優先したのだ。 転校させるか否か、ここで考えればいい。 母さんはそう言うてくれた。

「拓人の意思是、どうするんです？」

母さんが口を挟む。

「あなたがここに来た時の様子をちゃんと見ていました？ あの子、固まっていましたか」

「それは私が来たことに驚いているだけです。 もちろんあの子の意思は尊重したいですが、あの子はまだ混乱しています。 今、我々が何を聞いても無駄でしょう」

母さんには丁寧な口調で答える。 私はそんな彼の態度に言い知れぬ怒りを抱いて言う。

「混乱を抱かせたのはあなたの行動です。 私はそんなあなたに拓人を渡したくはありません」

そういつと、彼は嫌味っぽく聞いてくる。 挑戦的な目で。

「その理由は？」

私はさっきの言い知れぬ怒りの意味をそのとき理解した。そして
きっぱりと告げる。

「拓人を、あなたのような人間にしたいくはないからです」

私がそう告げたあと、客間に沈黙が下りた。 母さんの視線を感じ
るが、私は彼から目線を外さない。

ここで目をそらしたら、負けてしまう気がした。

「そうか」

もう十数秒沈黙が続いたところで、彼は深い溜息と共に立ち上がった。

「君がそういう姿勢なのは分かった。 拓人にどちらがいいか聞いて
みたいところだが、今のあの子では混乱してしまうだけだろう。
また後日お邪魔します」

最後の部分は母さんに、そこだけは丁寧に言った。

拓人はすでに混乱していた。

（どうして、今更…）

自分達のものが置いてある部屋に入って、ドアを閉めて。

（僕たちはいらないん、でしょ……？）

そう思ったところで、膝から力が抜けてへなへなと座り込んでしまった。父親が出て行ってしまったからの、数ヶ月間を思い出す。

いつもいた、いるはずの父親がいない。焦燥感。悲しげに微笑む加奈子の姿。父親の荷物が彼の部屋から消え始め、ようやくやってくる実感。

そんな日々を思い出して、思わず嗚咽が出てくる。

「う……、う……」

気が付けば頬を伝っていた涙に気付いて、ゴシゴシと擦った。ついでにこみ上げてくる嗚咽を隠そうとする。

「う……、う……」

それでも、隠せない。

いつそのこと、大泣きしてやろうかと思った。そのとき、

「拓人ごめんね、一人にさせちゃって」

ようやく元気になり始めた、今朝まで見ていた表情を浮かべた加奈子が入ってきた。

（お母さんは——泣いてない）

一番辛いのは、加奈子のはずなのに。 加奈子は泣いている拓人を見て、拓人の前にしゃがみこんで、視線を合わせた。

「今日は、花火でもしょっか」

柔らかく、楽しげに加奈子は笑って。 だから、拓人も涙をさつきより乱暴に拭いた。 それをみて、加奈子が笑った気がした。

（お母さんを、楽にさせてあげなきゃ）

それをみて、拓人は強く思った。

（お母さんを、無理させちゃいけない。 お母さんは、元の生活に戻らなくちゃいけないんだ）

決意

「本当に、いいのかい？」

山神様は言う。 拓人が彼女を祭る神社の前に姿を現したとき、
「おや、早かったね」と言ったが口調は対して驚いた様子ではなかった。

「この契約を結べば、お前は私に命を差し出し、お前の母親は元の生活に戻る。それでいいんだね？」

山神様はもう一度言う。 感情をこめた様子ではなく、ただ単に確かめていると言う感じた。 はい、拓人がそう言おうとしたとき――。

「おや、野暮な真似するんじゃないよ」

ひとつの小さな光が、草むらから飛び出してきた。

（蛍？）

拓人が疑問を浮かべている間も、その蛍らしき光は山神の周りを何かをアピールするようにぐるぐると旋回した。

「ふん、あんたら揃って馬鹿だね」

山神が鼻息荒く蛍に向かって言った。 そのあとも蛍は螺旋飛行などをしてアピールした。

「……分かったよ」

遂に山神が蜚の説得（？）に折れ、拓人のほうに向き直った。
フード越しに拓人の瞳をしっかりと見据えているような気がした。

「真実を教えてあげよう。 さて、これを知った後お前は どうするか…… 私はもう確認したり、誰の横槍も聞き入れない」

鮮烈な紅の唇が動く。

「あとは、お前自身が決めること」

幼い自分が横にいた。 今よりも少し若い加奈子と、優しそうな、拓人の覚えている通りの死んだおじいちゃんが岸の岩の上に腰掛けてみていた。 二人ともとても楽しそうに拓人のほうを見ている。

（えっ、ここは——！？）

焼きつくような夏の陽光。 からつとした暑さ。

今の拓人の膝ぐらいまでの水位の流れのゆるい川。 大きな石がごろごろ転がって、そしてここは昨日「飛び降りる飛び降りる」と五月蠅く言われた、一番大きい岩。

「拓人ーっ、登るのはいいけど、飛び降りちゃ駄目よ——！！」

加奈子が叫んだ。 笑顔で言って、横ではおじいちゃんがヒラヒラと手を振った。

「ぼく、もうとびおりられるもーん！」

気付けば、拓人は幼い自分になっていた。　そうして、加奈子が「だめっ！」と叫んでいるのも気にせず、岩から――

（――ダメだッ！！）

飛び降りた岩からみるみるうちに水面に近くなり、全身に水が叩きつける痛みと、自らが飛び込んだことによってできた大きな音を最後に、拓人の意識は途絶えた。

幼い自分が眠っている姿を、また横から見ていた。　急いで呼ばれた近所の往診の医者が胸に聴診器を当てている。　聴診器が当てられた身体は包帯だらけだった。

加奈子が、泣いていた。　父親は、その横で沈痛な面持ちで座り「どうして止めなかったんだ」と加奈子を責めていた。　加奈子は泣きながらごめんなさい、ごめんなさいといっている。　父親と言うより、拓人に言っているのか。　おばあちゃんは、何も言わず、ただ辛そうな顔をしていた。

そしておじいちゃんは、その部屋にはいなかった。

場面が変わった。

夜の山の中、小さな神社の前。

（……山神様の、神社の前だ）

闇から溶け出てきたかのように、ローブを着た山神が現れた。

そして数秒後、古ぼけた小さな階段を登って、おじいちゃんがやってきた。その表情は、いつになく真剣で、そして沈痛な面持ちだった。

「お前、私に何か用があるんだろう？」

拓人に聞いたように、山神は言った。おじいちゃんは頷いた。

「はい、お願いがあって参りました」

「なら急ぎな。お前の孫、死にそうだよ」

山神が間髪いれず言って、おじいちゃんはかなり驚いた顔をした。山神はそれを見てふっと笑った。

「契約内容は知っているね？ お前の場合、今すぐ命を差し出さなくては間に合わない」

「はい。私の命、差し上げます。代わりに、孫の拓人を救ってください」

山神は白い頬に手を当て、嬉しそうに答えた。

「契約、完了だね……」

そして、拓人は助かり、不都合を失くすため、川での事故の記憶は拓人の中から消去された。おじいちゃんの死因は、病死と改変された。

再び拓人が目を開けたとき、そこはさっきの神社の前だった。

おじいちゃんはどうもない。

もう何年も前に、死んだのだ。 拓人の命と引き換えに。

「それでも、契約するのかい？ お前のために、一人の人間が死んだ。 その大切な命を、私に差し出すのかい？」

山神は言った。

「思い出しな。 今見せた記憶の中のお前の母親を」

拓人は山神の顔をしっかりと見据えた。 さっき、山神がそうしたように。

「答えは、どっちだい？」

拓人は答えをついさっき出した。 本当は、こんな選択肢を増やすこともなかったのだ。

「——拓人ッ！！」

加奈子の叱責にも似た叫び声に、拓人は覚醒させられた。 目を開けると、加奈子の泣き顔があった。

「……お母さん？」

むっくり布団から起き上がると、拓人はここがいつも寝ている部屋だということに気付いた。 そういえば、昨日山神の神社からどうやって帰った？

「お母さ——」「もう、心配したんだからね！」

昨日の様子を聞こうとした拓人は、加奈子に正面から抱きつかれた。

「もう、もう夕方なのに……叩いても、大きな音出しても何しても起きないんだから……ッ!!」

「お母さん？」

「あと五分で起きなかつたら、フライパンを頭にぶつけてでも起こそうかと……!!」

「それやめてお母さん僕死ぬから」

拓人がそう言うと、加奈子は更にぎゅっと拓人を抱きしめた。

「拓人までいなくなつたら、お母さんどうするの……?」

言われた拓人は、山神の力に頼った自分を馬鹿らしく思った。そして、抱きつく加奈子の身体にぎゅっと抱きついて呟いた。

「僕は、どこにも行かないから。だから、安心して」

その夜。

山神を祭る神社の前に、一人の女がいた。黒いローブに、鮮烈な赤の唇。この神社に祭られている山神である。

夏の星空を見上げる彼女の前に、小さな光が草むらから飛び出した。小さな螢である。

「ふん、あんたらは本当に馬鹿だね。まあ、あの加奈子という娘はそうではないようだが」

光はぐるぐると螺旋飛行する。

「本当じゃないか。本来の道に外れず、生きていく。それが人間だよ？　なのにお前ら二人はそれを私と言う超常的な力を利用して……」

光がまだ螺旋飛行をしているのを見て、山神はふっと妖艶に笑った。

「いや、確かに夢があるのはいいけどね。星に願いをかけて、そして自力でがんばるのが人間ってもんだろ？」

そして、数秒間の間を空けて続けた。

「それでも、迷った人間を小さな光で導くって言うのが私達の使命なのかもしれないけどね」

あとがき

こんにちわ、作者の亜梨栖です。

ホームページを開設してから、何人もの方に「面白かった!」という感想を頂き、とても励みになりました。あの方々がいらつしやらなかったら、私はこの作品を終わらせることが出来なかったでしょう。

本当に感謝しております。これからも応援よろしく願いします。

さて、本作は今から一年半前、私が中学一年の夏に構想を始めたものです。

「ともしび」という小中学生の作品を集めた本に出品するための、国語の課題のために考え出したものです。

その頃からライトノベルに嵌りだし、戦闘とかそういうものが出てくる話しか構想していなかった私は、先生に見せられる、健全な話はないか……と半日ぐらい悩み。

そこで「離婚し、落ち込んでしまった母のために人外の力を頼る少年の物語」を思いつきました。

ですが、はじめは拓人や母の描写が極端に少なく、小説と呼べるものではありませんでした。結局、学校代表から落選し、別のクラスメートが「ともしび」に載ったときはかなり悔しかったです。

ある十月の雨の日に、返却された創作文を読み返し、「このままじゃ登場人物に悪いな……」と思い、書き直し始めました。

ネット上にこの書き直した話を掲載してから何人もの方から応援を頂き、とうとう書き上げることが出来ました！ ありがとうございます。

では、これからも応援よろしく願いします！

平成二十年十二月某日

亜梨栖

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8492c/>

真夏の夜の小さな光

2010年10月13日18時10分発行